授業科目名 <英訳>	教育社会学講義 Topics in Sociology of Education	担当者氏名	人文科学研究所 教授　　富永　茂樹

配当学年	3,4回生	単位数	4	開講期	通年	曜時限	火4	授業形態	講義

共用科目	他

[授業の概要・目的]

18世紀における家族の規模の縮小と内部の関係の親密化の過程を検討したPh.アリエスは最後に「家族の感情と社交性とは相容れないもので、一方が他方を犠牲にしてでしか発達しないのではないか」と、深刻な問題を提起する。この命題が正しければ、近代社会で成長したとハバーマスのいう「公共圏」にかかわる議論には全面的な疑問が付されなくてはならなくなるであろう。他方で同じ時期における「公共人の衰退=親密性の暴政」に注目するセネットは、アリエスと軌を一にし、ハバーマスと対立するかに見えるが、しかしその議論もまた必ずしも説得力をもつとはいえない。この授業では、こうした親密性と公共性の複雑な絡まりを解きほぐすことによって、現代の家族社会学にとってもコミュニケイション論にとっても基本的な概念の整理と総合とを試みる。とりわけ今年度は社交の衰退とともにはじまる、とされる親密な生活に目を向け、18・19世紀におけるその特性を検討すると同時に、現代世界におけるその「運命」について考えることになる。

[授業計画と内容]

前期では、前年度に行った議論を踏まえながら、問題のありかの確定と基本的な概念の整理を行ったうえで(第1―6回)、18・19世紀のフランス社会を中心に、家庭生活における親密性の浸透のさまを概観し(第7―10回)、さらにそれをアレントが「親密性の最初の探究者」と呼ぶジャン=ジャック・ルソーのいくつかのテクストと関係づける(第11－15回)。
後期に入ってからは、前期で明らかになるはずの18世紀以来の親密性にふくまれるいくつかの問題を傍らにおきながら、その背景にある近代人の思考の様式とその特徴に考察を加え(第1－6回)、さらにこの親密性の拡大を可能にした思考様式そのものが、実は親密性を内部から破たんさせることになる社会的過程を明らかにする(第7－10回)。だが、それでは公共領域とともに親密領域もまたわれわれわれの前から姿を消し、あとにはなにも残らないのだろうか。そうではなくして、そこからなにものかが生まれてくるとすれば、それはいったいどのようなものなのか。親密性が乗り越えられたあとの世界の可能性を探るのが、最後に進めるべき作業となる(第11－15回)。
以上の過程を経過するうえで、社会と主体とを見るための基本的視点を提供してくれるのは、文学作品をはじめとするさまざまなテクストであり、これらがたんなる材料というよりは、われわれ自身の思考そのものをかたちづくることになるであろう。

[履修要件]

特別な知識は必要ではないが、18世紀以後今日にいたるまでのコミュニケイションや社交、家族をめぐる問題、広くは公共性と親密性という主題に関心があることが望ましい。

[成績評価の方法・基準]

学年末に試験を実施し、1年間の授業内容をどれだけ理解しているかを判定して、これにもとづいた成績評価を行う。

教育社会学講義(2)へ続く↓↓↓

教育社会学講義(2)

[教科書]

使用しない
授業で解読するテクストについては、適宜コピーを配布する。

[参考書等]

（参考書）
Ph・アリエス 『子どもの誕生』（みすず書房）
H・アレント 『人間の条件』（ちくま学芸文庫）
E・ショーター 『近代家族の形成』（昭和堂）
R・セネット 『公共人の衰退』（晶文社）
富永茂樹 『理性の使用―ひとはいかにして市民となるのか』（みすず書房）
その他必要と思われるものについては、授業中に紹介する予定。

（その他（授業外学習の指示・オフィスアワー等））

※オフィスアワー実施の有無は、KULASISで確認してください。